

## 編集後記

所報 46 号をお届けする。

本号では、高橋清徳「西欧の身分議会や中世都市などの研究をめぐって 研究生生活を振り返る」、伊藤雄司「保険契約における告知義務と詐欺・錯誤との関係について」、高木侃「縁切寺研究余話 1・松ヶ岡川柳」、広渡清吾「書評・日本の『市民社会』をどのように展望するのか」の 4 本の論稿を収録した。

巻頭論文は、2012 年 3 月に専修大学法学部をご退職された西洋法制史の高橋清徳先生が、先生の学生時代から今日に至るまでの研究生生活を振り返られた法学研究所での定例研究会でのご報告をまとめられた論稿である。50 頁に及ぶ大作の中で、先生が学ばれた東北大学での世良晃志郎先生と広中俊雄先生のゼミでの研究の様子から始まり、先生が歩まれた研究生生活が淡々と語られているが、基礎研究の重要さとともに、学問研究の厳しさ、学問の深遠さをあらためて教えられ、身の引き締まる思いがした。

伊藤論文は、若手商法学者として期待されている筆者の本格的な研究論文である。保険契約の告知義務と意思表示との関係を主題としたこの論文では、詳細な検証がなされており、読み応えがある。高木論文は、日本法制史の縁切寺研究の大家である筆者が、縁切寺を題材とした古川柳に焦点をあて、文芸に現れた縁切寺をモチーフとした論稿である。軽妙な筆致の中に洒落な趣があり、興味深い。広渡論文は、古川純編『「市民社会」と共生』（日本経済評論社、2012 年）の書評である。90 年代初めのハーバーマスの「新しい公共圏論」を契機として、「市民社会論」の議論が盛んであるが、その評価や位置づけについては百家争鳴の感がある。広渡論文では、書評を通して、自らの市民社会論にも言及されており、大いに示唆を受けた。

内藤 光博（本研究所事務局長）